同窓生シリーズ 第97回

40回生

畑中 千晶

Chiaki Hatanaka

略歴
1985年　新宿高校入学
1987年　「高校生科学プログラム」で米国・シカゴを３週間訪問
1988年　東京学芸大学教育学部中等教育教員養成課程国語科入学
1990年　フランス国立東洋言語文化大学（INALCO）に１年間留学
1993年　国際基督教大学大学院比較文化研究科入学
2004年　同大学院博士後期課程修了（最終学位：博士（学術））
2005年　敬愛大学国際学部専任講師
2008年　敬愛大学国際学部准教授
2011年　敬愛大学国際学部教授

チャンス逃さず踏み出して

米国でのホームステイやフランス留学を経験し、日本近世文学の研究者に。最近はボーイズラブ（BL）関連の著作が注目されている40回生の畑中千晶さん（敬愛大国際学部こども教育学科教授）にお話をうかがいました。

思い出いっぱい

長い伝統があることに魅力を感じて新宿高校を選びました。高校の3年間は楽しい思い出がいっぱいです。天文部の合宿で夏休みに館山寮に行き、砂浜に寝転がってペルセウス座流星群の観測を一晩中しました。蚊の猛攻撃に耐えながらです。天体観測には根性がいると実感しました。

現代社会の授業で、防災をテーマにグループ研究に取り組んだことも忘れられません。西新宿の三角ビル（住友ビル）を訪ねて免震構造について調べました。テーマはもちろん、どこに行って誰に会い、どんな話を聞くかも、全て自分たちで決めました。修学旅行で京都や広島に行ったことも思い出深いですね。

当時は女子がクラスの4分の1くらい。標準服は「ダサい」「やぼったい」という理由でほとんど着ませんでした。代わりに「かわいいから」という理由で、なぜか都立駒場高校の制服を着てました。今から考えると変ですけどね。

そういえば、学校と新宿御苑との間には「秘密の通路」があって、「出入り自由だ」と言って行き来している生徒もいました。

自由な雰囲気だったと思います。学校は規則で縛ろうとはしない半面、先生が「自由には責任が伴う」と繰り返していました。当時はのんびりしていて、多くの生徒は高校3年間はたっぷり遊んで、浪人してから勉強しようと考えていました。高校時代の友達とは、今でも付き合いが続いていますね。

米国訪問が転機に

転機になったのは、3年生のときに3週間、米国を訪問したことでした。担任の先生が参加しないかと声を掛けてくれたのですが、米国エネルギー省の「高校生科学プログラム」というもので、シカゴのフェルミ国立加速器研究所に行って素粒子などについて学びました。現地の研究者の家にホームステイもしました。そこで外国の生活と文化に触れ、日本語や日本文化について説明したことは、後から考えると重要だったなと思います。

高校時代、最も影響を受けた国語の先生から「自分の言葉で語る人になりなさい」と言われたことも大きかったですね。自分の頭で考え、それを発信する人になりなさい、という意味合いだったと思います。

大学は東京学芸大学に進みました。古典文学に興味があり、その勉強ができて教員免許も取れるということで選びました。そこで近世文学を学ぶゼミに参加して江戸時代の文芸に触れ、魅力に目覚めたのです。

フランス留学と西鶴

中学生の頃からフランスに関心を持ち、フランス語を学びたいと思っていました。大学に入ってから、その願いをかなえ、フランス語の勉強を始めました。大学に国費留学の枠があることを入学後に知り、「絶対に留学する」と心に決めたのです。3年生の秋から1年間、パリに留学することができました。

すると、パリの書店には井原西鶴の作品の翻訳書が並んでいたのです。現地の新聞「ル・モンド」には、そうした本の書評が掲載されていました。300年以上も前に日本の作家が書いた作品が、時代や文化を超えて人々を引きつけているということを目の当たりにしました。

この経験を生かし、「翻訳を通じて日本古典文学を読み解く」という、現在も行っている研究手法につなげていきました。翻訳を介して分析すると、西鶴が作り出した物語の特徴や日本語の性質、文化的背景といったものがより鮮明に浮かび上がると考えたからです。その後、国際基督教大学（ICU）の大学院に進み、博士論文としてまとめたのが、著書の『鏡にうつった西鶴――翻訳から新たな読みへ』です。

いまBLが熱い！

最近は井原西鶴の『男色大鑑』などが「ボーイズラブ」（BL）の文脈で注目されていて、私も漫画化された本に原作の解説を書いたり、関連本を刊行したりしています。学問的な正確さを失わないようにしながら、分かりやすく伝えるように努めています。

実は専門的な学術書は読者がとても限られていて、ほとんど反応がないのですが、BL関連本はツイッターやブログですぐに感想が書かれて、一般読者の反応があるのがとても新鮮だし、うれしいですね。海外にも読者がいるようで、英語のまとめサイトができていたのにはびっくりしました。ある種の「地殻変動」とも呼べるようなものが起きていると感じています。

BLの漫画やアニメが好きな「腐女子」って、すごくリテラシーが高いんですよ。作品の中のわずかな手掛かりを探り、「萌え」を感じながら深く熱く読み込んでいくのです。「好き」のエネルギーは莫大だと痛感します。

所属していた物理部水上合宿での一コマ

研究問い直す契機に

古典文学へのアプローチは多様であるべきでしょう。その一つにこうした入り口があってもおかしくはないし、研究者として何か力になれるのであれば、これほど幸せなことはないと感じています。

「教養だから勉強しなさい」といった押し付けは有害ですらあります。大学での文学研究も「こう読むべきだ」という目指す形があって、学生がそれを外れると教員が矯正しようとする、といった面があります。でも、楽しみとしての腐女子のような読み方があってもいいと最近は考えています。愛好者の間口を広げるという意味があり、凝り固まった考え方の研究を問い直すきっかけにもなると思います。

漫画家さんとのつながりもできたのですが、想像力が本当に豊かで、事実と事実の「すき間」を埋めていくような読み方をされるのです。とても刺激を受けています。

パリ・ディドロ大学に客員教授として教えに行ったら、日本語学科の学生は「オタク率」がとても高くて、フランス語訳された日本のBL本を読んでいるのです。「フジョシ」という日本語もそのまま使われているんですよ。サブカルチャーの影響力の大きさなど、日本とフランスで共通する点、同時代性があるのだと痛感しました。

「やる」方を選ぶ

私は高校時代に米国を訪問する機会があり、大学ではフランス留学で視野を広げることができました。何かのチャンスが目の前にあって、「やる」か「やらない」かを選択できるとしたら、高校生の皆さんには、ぜひ「やる」方を選んでほしいのです。

また、やりたいこと、興味を持つことがあるのだったら、周りがどう言おうと心の赴くままに取り組んでみてほしい。その先にこそ、新しい世界が開けてくるのではないでしょうか。そして、親御さんには、そういうお子さんの気持ちをサポートしていただければと思います。

〈著書・編著書〉
■畑中千晶（2009）『鏡にうつった西鶴――翻訳から新たな読みへ』（おうふう）
■染谷智幸／畑中千晶編（2017）『男色を描く――西鶴のBLコミカライズとアジアの〈性〉』（勉誠出版）
■染谷智幸／畑中千晶編（2018）『全訳　男色大鑑〈武士編〉』（文学通信）
■染谷智幸／畑中千晶編（2019）『全訳　男色大鑑〈歌舞伎若衆編〉』（文学通信）
■寺田澄江／加藤昌嘉／畑中千晶／緑川眞知子編（2018）『源氏物語を書きかえる　翻訳・注釈・翻案』（青簡舎）ほか